

## ラオス帰国研修員フォローアップ調査<その2>

### 現地における技術定着とその担い手

第2回では、日本での研修を通じて習得した野菜生産技術が、ラオスの現場でどのように活用されているのかについて、帰国研修員の実践と声を交えて紹介する。

今回のフォローアップ調査では、帰国研修員が所属する機関や農家圃場を訪問し、研修で学んだ技術の活用状況を確認した。その結果、接ぎ木技術や堆肥製造、育苗管理といった基礎技術が現地に導入され、一定の成果を上げていることが明らかとなった。

クリーン農業を推進する Clean Agriculture Standard Center (CASC) では、トマトの接ぎ木技術が実際に活用されており、報告によれば成功率は約 70% に達している。病害に強い苗の生産は、安定した野菜生産に寄与しており、研修員が中心となって導入と改良が進められ、農家への配布が実施されている。また、家畜糞を活用した堆肥づくりやマルチ栽培なども実践されており、これらは有機農業の推進と農薬使用の低減に貢献している。



研修員（左端）による接木指導

実際に視察したトウマン村のオーガニック農家グループでは、こうした技術が複数農家で共有されており、パクチーやキャベツ、トマトなどの野菜生産に活用されていた。研修員は「堆肥の作り方や栽培方法を体系的に説明できるようになったことで、農家の理解が深まった」と話していた。

教育機関である Champasak Agriculture and Forestry College (CAFC) では、技術の活用は教育面にも広がっている。ノギスや SPAD 計などの測定機器を用いた生育評価が授業に取り入れられ、データに基づいた栽培管理の指導が行われていた。研修員は「数値で示すことで学生の理解が

深まり、実験の質も向上した」と述べており、技術が教育の質向上に寄与していることがうかがえた。

一方で、現地での技術適用には課題も見られた。例えば、CAFC の農場で行われているトウガラシのハウス栽培実験では、生育不良や養分欠乏と考えられる症状が確認されており、土壌や養管理の重要性が改めて認識された。また、灌漑設備に使用されている資材の品質が十分でないことにより、栽培実験に影響が生じていることが確認された。これに対し、研修員からは「日本で学んだ技術を活かすためには、土壌分析や資材条件の理解がさらに必要である」との声が聞かれた。



トウガラシの実験の様子

さらに、技術と市場との関係についても課題が見られた。調査の中では、トウガラシの価格が季節により変動することが確認されており、安定した収入を確保するためには、作期の分散やマーケティングを意識した生産計画が求められている。研修員からは「より市場動向に対応した技術導入が重要である」との認識が示されていた。

今回の調査を通じて、日本で学んだ技術は、ラオスの現場において確実に活用され始めていることが確認された。同時に、それらの技術を現地条件に適応させ、より効果的に活用するためには、土壌管理や資材選択、市場との連動といった要素を含めた総合的な対応が求められている。研修員たちは、こうした課題に向き合いながら、試行錯誤を重ねて技術の定着を進めている。

最終回となる次回は、こうした技術の活用を支える研修員の成長や、組織・地域への波及効果に焦点を当て、人材育成の観点から今回のフォローアップ調査を振り返る予定である。